



## 笑いの『大和物語』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学語学文学会 公開日: 2017-04-20 キーワード: 作成者: 伊藤, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00010600">https://doi.org/10.32150/00010600</a>

# 笑いの『大和物語』

伊藤 一男

『大和物語』の主題が「あはれ」であるということは、しばらく自明のこととして認められてきた。たしかにそういう面が在ることは否めないが、それですべてを理解しようかというような態度には、『大和物語』に触れば触れるほど、納得し難いという感を持つようになつてきた(注1)。

ところで、ある和歌が物名の歌であるかどうかは、何によつて判断できるのであるうか。その歌が物名歌であることは、いったい何が保障してくれるのか。

たとえば、次のような場合。

山高みつねに嵐の吹く里はにほひもあへず花ぞ散りける

(古今集・物名・しのぶぐさ・紀利貞)

神無月わが身あらしの吹く里はことの葉さへぞうつろひにける

(秋萩集) (注2)

この二首はいずれも「しのぶぐさ」という文字列を持つ歌でありながら、前者は「忍ぶ草」の物名歌であり、後者は物名歌であるかどうかは判然としない。

五月雨にならぬかぎりは時鳥何かは鳴かむしのぶばかりに

(拾遺集・物名・花柑子・仙慶法師)

埋れ木は中むしばむといふめれば久米路の橋は心して行け

(拾遺集・雑恋・題知らず・よみ人知らず)

また、この二首に關しても、どちらも「はなかむし」という文字列を含みながら、前者のみが「花柑子」の物名歌となつている。さらに後者には、『匡衡集』に上二句の共通する歌が見える。

花柑子を人詠みしに

埋れ木は中むしばむと磯馴るるふるの橋々心して踏め

この歌は、詞書によると、初句から二句にかけて「はなかむし」が隠されていることは確かである。しかし、『拾遺集』雑恋の歌は、これと同一の上二句を持ちながらも、収載状況からしても、物名歌でないと考えるほうがよさそうである。

神奈備の三室の岸や崩るらん龍田の河の木濁れる

この歌は、『拾遺集』物名においては「むろの木」の題を持つが、『和漢朗詠集』には「山水」の題のもとに収められている。『拾遺集』では、歌の中に含まれる「むろのき」という文字の並びに意味を認めているが、『和漢朗詠集』では全くそれを無視していることになる。

以上の例から考えると、物名歌であるかどうかは、和歌そのもの

から判断し切ることはできなそうである。もつとも、

かき曇りあやめも知らぬ大空にありと星をば思ふべしやは

(貫之集)

における「ありと星をば」のように、通常の言い回しからははみ出すような表現を持つ歌は、そこに生ずる異和感によって物名歌であることを主張することになるが、そういうものを含まない歌にあつては、それが物名歌であるかどうかは、まったく歌の外側に頼るしかない。それは、裏を返せば、周囲の状況を整えれば、本来物名歌でなかつたものを物名歌に仕立てることもできるということでもある。物名歌として詠まれた和歌も、その文字の並びが見過ぎられると物名歌ではなくなるし、また、偶然生じた有意の文字列に気が付き、それを明示したとき、それは物名歌として扱われるようになるということであろう。

もう少し問題を広げると、和歌に託された意味は、その意図したものを十全に実現することはないのである。詠作状況を従えている際には、ほとんど誤解が生ずることはなさそうであるが、そこから切り離された和歌は、ある意味での自由を獲得する。詠作時に込められた意味が忘れさられたり、本来はまったく持つていなかったような意味を、後人の誤解や付会が付け加えていたりすることも珍しくない。

次に掲げるのは『大和物語』一五七段である。

下野の国に男女すみわたりけり。としごろすみけるほどに、男、妻まうけて心かはりはてて、この家にありける物どもを、今の妻のがりかきはらひ運び行く。心憂しとおもへど、なほま

かせてみけり。ちりばかりのものも残さずみな持て往ぬ。ただ残りたるものは、馬槽のみなんありける。それを、この男の従者、真楫といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りにおこせたり。この童に女のいひける、「なむぢも今はここに見えじかし」などいひければ、「などでかさぶらはざらん。主おはせずともさぶらひなん」などいひ、立てり。女「ぬしに消息きこえんは申てんや。文はよに見給はじ。たゞ、言葉にて申せよ」といひければ、「いとよく申てん」といひければ、かくいひける、

「ふねも往ぬまかぢもみえじ今日よりはうき世中をいかでわらたんと申せ」といひければ、男にかくといひければ、物かきふるひ往にし男なん、しかながら運びかへして、もとのごとくあからめもせで添ひるにける。(注3)

この章段の和歌に見える「まかぢ」という語は、左右一對の楫とも立派な楫ともいわれるもので、『万葉集』には  
大船に真楫繁貫き大王の御命恐み磯廻為るかも

(卷三・三六八)

朝なぎに真楫榜ぎ出でて見つつ来しみ津の松原浪越しに見ゆ

(卷七・一一八五)

などと、ごく普通に詠まれていた語であつたが、平安時代になると、ほとんど見られなくなる語であつた。わずかに『古今六帖』あたりに数例を見るだけとなる。おそらくは、そのような異和感が、「真楫といひける童」という設定をうみだすことになつたのであろう。「ふねも往ぬ」の歌は、本来、「(世の中を)渡る」と「(海を)

渡る」との掛詞を軸に、生活のままならぬさまを、海路の移動になぞらえたものであろう。舟もいつてしまい、真梶までも見えなくなってしまうのは、海を渡ることなどできるはずもない、そのように、今日からはこのつらい世をどのように渡っていったらよいか、ということ詠んだ歌であって、今日生じた事情が如何なるものであるかは、必ずしも歌の中に詠み込まれていなくてはならないものでもない。

一五七段では、「真梶」を童の名としたところで、「ふね」を馬槽とする必要が生じた。「真梶」だけに解決をつけたのでは何とも落ち着かない、そういう判断は、いかにもありそうなことだ。そして、「ちりばかりのものも残さずみな持て往ぬ。ただ残りたるものは、馬槽のみなんありける。それを、この男の従者、真楫といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りにをこせたり」というふうにし立て上げる。

新しい妻のところ、「この家にありける物どもを」「かきはらひ運び行く」、そういう男がいてもいい。「ただ残りたるものは、馬槽のみなむありける」というのも、幾分の不自然さはあっても、そんなことがあるかもしれない。しかし、馬槽を取りに来たのが「真梶」だというのは、あまりにできすぎである。できすぎを通り越してうさんくささを感じられる。

もし、馬槽を真梶に取りに行かせることが意図的であつたとしたら、それは「舟もいぬ…」というような詠歌を招来しているとも解せるが、「この家にありける物どもを、今の妻のがりかきはらひもて運び行く」というような男の行為としては、まったくそぐわない。

この男が意図的に仕掛けたものではなからう。「舟も往ぬまかぢも見えじ今日よりはうき世中をいかでわたらむ」という歌を核として、その歌の意を解し、詠歌状況から説明していったのがこの章段ということにならうか。

ところで、このようなあり方は、「笑い」というものと非常に近い。次に引くのは、山東京伝の『百人一首歌始衣抄』の在原業平歌についての記事を摘記したものである。

ちはやふる ○ちはやといふ女郎ありけるが、ある角力取、その女郎をあげてあそびけるに、此女郎、よく客をふる癖ありて、かの角力取を、その夜さんぐふりける。

神代もきかす ○かの角力取はちはやにふられてさみしく独り寝してゐるゆゑ、いもと女郎の神代といふをくどいてみられど、神代もき、入れぬなり。

龍田川 ○かの角力取の名を龍田川といふ。その後角力取をやめ、豆腐屋を始め、渡世をいたしける。

からくれなゐに ○ちはやはあまり客をふりくして、年開けのじぶんも、世話にならうといふ客もなく、つひに紙屑買ひの女房となり、ここにも居とげず、又たどん売の女房となり、今はその日を暮らしかね、朝夕の食事にも、かて飯を食ふやうな事にて、龍田川が内とも知らず、かの豆腐屋へ豆腐のからを貰ひに行きしが、龍田川は昔の意趣があるゆゑ、からをくれぬ也。その心をからくれなゐとは詠めり。

水くくる ○ちはやは、所詮かつゑて死なんよりは、いつそ身を投げんとからす川へ身を投げける。その心を水くぐると

詠めり。

とは ○とはとはちはやが幼名なり。(注4)

一見『大和物語』とは大きな隔絶がありそうであるが、実はその差はほとんどない。「ちはや」「神代」「龍田川」「とは」のように、処理しにくい語は人名にまかせる。「真梶」を童の名とするのと発想は同様である。

このようにして和歌に新たな意味を付与していったとき、そこに生ずるのは笑いである。『百人一首歌始衣抄』の「ちはやふる」の歌の解はそのまま落語に受け継がれるが、その下げは「とは」をちはやの幼名とするところとなる。その笑いは、歌の内容とは別の次元に存する。かつての所業の因果に世をはかなんだ女が入水したという、笑いとは大きく掛け離れているはずの歌が、その本来の意味と全く異なつて解されるとき、その格差が笑いを生み出す。それは、『大和物語』においても、また同様であった。

筑紫つくしにありける檜垣ひがきの御ごといひけるは、いとらうあり、をかしくて、世を経けるものになんありける。歳月としかくてありわたりけるを、純友すみともが騒さわぎにあひて、家も焼やけほろびもの具ぐもみなとられはてて、いとみじくなりにけり。かかりともしらで、野の大貳討手うての使つかひに下り給ひて、それが家のありしわたりをたづねて、「檜垣ひがきの御ごといひける人に、いかであはん、いづくにかすむらん」とのたまへば、「このわたりになんすみし」など供ともなる人もいひけり。「あはれ、かかる騒さわぎにいかがなりにけむ、たづねてしがな」とのたまひけるほどに、頭かしら白しろき女のひと水みづ汲くめるなん、前まへよりあやしきやうなる家にいりける。ある人

ありて「これなん檜垣ひがきの御ご」と言ひけり。いみじくあはれがり給てよばすれど、恥はぢて来こでかくなんいへりける。

むばたまのわが黒髪くろかみはしらかはのみつはくむまで老せいぞしにける

とよみたりければ、あはれがりて、きたりける柏あけ一ひと襲か脱ねぎてなむやりける。(一二六段)

ここで詠まれた「むばたまのわが黒髪はしらかはのみつはくむまでなりにけるかな」の歌は、檜垣伝説とは切っても切れない歌としてよく知られたものであるが、この歌の「みつはくむ」という語について、「瑞歯ぐむ」「三歯組む」「三輪組む」など、様々に説明される。今井源衛『大和物語評釈』の説明を借りると次の通りである。

「みつはくむ」は古来諸説あり、(一)老人が歯が落ちた後に、再び小さい歯が生えかける長寿の瑞相。(二)老いて背中や腰がまがり、膝が突き出し、頭が垂れて、三つの輪が入り組んだ形になること。(三)歯がまばらに落ちて、上下三枚で相互に入り組んだ形となること、などという。「みつはさす」ともいい、「ぐむ」「さす」ともに、「涙ぐむ」「芽ぐむ」「芽さす」など物のきざす意に用いる接尾語であるところで見れば、語源的には(二)の説が穩当で通説である。しかし、平安時代末には『類聚名義抄』に「支離ミツワサス、莊子、支離、注、身体無収拾之貌」とあり、『伊呂波字類抄』も、これと同様「支離」をミツワクムとよんでいる。そのころには、源義は忘れ去られて、ひたすら老衰敗残の態をさし、以上三説の中では、

(三) の意に近づいていたものか。(二) は「は」に「輪(わ)」を宛てる点に無理があるう。(もつとも「みつわ」の本文を採る巫・鈴・抄・群では、この説を採っていた可能性があるが。) なお「みつは(瑞齒)くむ」に「水は汲む」を掛ける。

諸注や辞書類を見る限りでは、妥当なところかと思うが、「瑞齒くむ」とするにはやや抵抗が大きい。「瑞」は瑞祥であり、「瑞齒」が長寿の瑞祥であることに異論はない。その語感が「みつはくむ」に生きているとすると、この歌の内容にはそぐわないことになる。次に掲げるのは『重之集』の歌であるが、下句はほぼ同じものとなっている。

枇杷殿の御絵に、石井いはゐの女の水汲む、さし覗きつつ影見る  
年を経てすめる泉に影見ればみつはくむまで老いにけるかな  
同歌を収めた『後拾遺集』からも「枇杷殿の御絵」というのがどのようなものかはわからないが、屏風絵や障子絵だとすると、この「みつはくむ」に瑞意が込められていて当然であろうが、「むばたまの」歌にそれは認め難い。また、『嘉言集』にも「みつはくむ」を用いた歌が見える。

#### おきな水汲むところ

底ひなき石井の清水君が代にいくたびみづはくむとすらん  
「花山院にて、三首」と題したうちの一首。こちらも屏風絵や障子絵に付された和歌であり、「君が代にいくたび」というような瑞意表現とともに詠まれていることからすると、この「みつはくむ」にも瑞意を認めてよいかもしれない。ただし、この三首の内には「亡

くなりたる人の家あり、すなはちその人屍になりにけり」という歌もあることから考えると、『嘉言集』の場合は落魄のイメージを読み取るほうがよいかもしれない。あるいは、『大和物語評釈』が「このころ、檜垣姫の伝承に類したものが、屏風絵になっていた」というようなことがあったのかもしれない。『重之集』の場合も、森本茂『大和物語全釈』のいう「『重之集』の歌は、女が井戸で水を汲む絵を見てよんだものだが、重之はすぐ檜垣の御を連想し、後撰集の「年経れば」の歌をふまえて、檜垣の御の立場に立つて歌をよんでいる」という見解が正しく、嘉言歌、重之歌の「みつはくむ」には瑞意を認める必要がないかもしれない。そうだとしても、それは檜垣の御の歌を踏まえているからであって、檜垣の御の「みつはくむ」に瑞意が認められないことと理由とはならない。もつとも、長寿の瑞祥に落魄を重ねるところに皮肉な自嘲を読み取ることができなくもないが。

「みつはくむ」が非常に年老いるという意味を持つ語として用いられていることは確かであるが、それが何に発するものであるかは不明としかいいようがない。その状況は、「むばたまの」の歌が詠まれた時点でも、『大和物語』がつくられた時点でも、さほど違いはなかったことであろう。「みつはくむ」が、はなはだしく年老いる、という意味の語としてあって、それを置いて「むばたまの」という歌を詠んだ、そして、「みつはくむ」という語を歌に用いる必然として、「頭白き女の水汲める」という状況が設定された。ひとまず、この章段のできあがった経緯をこのように押さえておくことにしよう。あるいは、水を汲むというのが詠者の意図的な行為とし

てあつたかもしれない。元来水汲みとは縁のなかつた「みつはくむ」を、「水は汲む」と解しているところは、『百人一首歌始衣抄』と同類の仕立て方といえる。

筑紫の白河といふところに住みはべりけるに、大弐藤原興範朝臣のまかりわたるついでに、水たべむとて、うち寄りてこひはべりければ、水を持って出でて詠みはべりける

檜垣の姫

年ふればわが黒髪も白河のみつはくむまで老いにけるかな

(後撰集・雑三)

「水たべむとて、うち寄りてこひはべりければ、水を持って出でて」、このような仕立て方も同類ではあるが、それは『後撰集』と『大和物語』の類同性に発するものといえよう。もつとも、このような仕立ては、たんなる物語的脚色ということであるかもしれないが、そうであつたとしても、笑いと近接する。

次に掲げるのは一〇二段である。

土佐の守にありけるさかみの人真といひける人、病して弱くなりて、鳥羽なりける家に行くとしてよみける、

ゆく人はそのがみ来むといふものを心細しな今日の別れは  
この段の「鳥羽なりける家」について、『大和物語評釈』は、御巫本の独自異文「訪はずなりける家」を採用する。その理由としては以下の通りである。

…第一には、この鳥羽と言う地名が出るべき理由が至つて乏しいことである。通常、歌語りにこの種の地名を持ち出す場合には…後の和歌の歌詞の中にそれと語呂や意味の上で関連のある

懸詞が縁語が用いられることが多いのであるが、ここにはそれは認められない。また、人真が瀕死の重体であるのに、京都の三条あたりから南に七キロメートルも隔たった鳥羽まで出掛けられるものかどうか。

だが、この歌には「ゆくひとは」と「鳥羽」の語を見出す事ができる。しかし、その「鳥羽」は、あることはあるが、意味の上で有効に機能していない。物名の場合、隠された語が実質的に意味を持つ必要は必ずしもないのであるが、それにしても唐突に過ぎる。「鳥羽なりける家に」と地の文でいうことで、歌中の「とは」に「鳥羽」という地名を付与していく、そんな仕組がありはしないか。さうにいえば、「守」「人真」「いひける」「行く」という地の文に見える語は、「ゆく人はそのがみ来むといふものを」と歌中にも見出せる。和歌の内容はそれとして、地の文とともに一章段に仕立てるとき、それぞれの語に関わりを持たせていく、そんなあり方として理解してよいように思われる。

次は一六段。

陽成院のすけの御、ままちちの少将のもとに、

春の野ははるけながらも忘れ草つらき心の種しなければ

少将返事、

春の野に生ひじとぞ思ふ忘れ草生ふるは見ゆるものにぞありける

この段の贈答は、諸本、

春の野は遙けながらも忘れ草生ふるは見ゆるものにぞありける

春の野に生ひじとぞ思ふ忘れ草つらき心の種しなければ

のように、下句がそのまま入れ替わっている。掲出した形を採っているのは為氏本のみである。この形でも、贈歌は、春の野はどれほど遠く離れてみえても、忘れ草の生えるような薄情なお心がありませんで、答歌の方は、春の野には生えないだろうと思う、生えているのは目に見えるものなのであります、とそれぞれ一通りに解することはできるが、両者の対応が何ともうまくいかない。やはり、この贈答は諸本の通りとするのがよからう。

この段に見える「ままちちの少将」について、『大和物語鈔』は次のように訳す。

小野絃風也。寛平二年任右少将。(注5)

さらに「春の野は」の歌について、

春の野ながらも忘れ草(萱草也)は生ふる也と、小野の春風が名によせて、途絶を恨みたる也。

と釈す。

『大和物語評釈』は、次のように記す。

：『古今集目録』小野春風条には「仁寿四年十一月二日任右衛門少尉、(中略)元慶二年六月八日任鎮守府將軍兼相模介、(中略)寛平二年(八八〇)正月二十八日右近衛少将、閏九月廿日任陸奥權守、同三年正月三十日兼讚岐權守、昌泰元年叙正五位下」とあるが、彼はとくに元慶年間の蝦夷征討によって有名であった。：鈔が「絃風」とするのは、父の葛絃と混じた誤りで、春風のことを指すのである。しかし、春風は、この「ままちちの少将」には該当しない。第一には、彼の少将在任は八九〇年の正月から閏九月までの十ヵ月足らずであり、その後も昇

進しているから、その後数十年を経た『大和物語』の成立時に、なお「少将」の呼称があったとは考え難い。また、つぎの十七段に、「まま父の少将」は敦慶親王家の女房と関係があったとあるが、敦慶は、春風が右少将のときわずか四歳であつて、時代が合わないのである。：鈔は、「少将」の官記と、後述の如く、「春の野」の詞から、自由な想像説を捏造したのであろう。さらに、「春の野は」の歌について、「鈔は：初句に「小野春風」を寓したものと見るのである。おもしろい着想ではあるが、必然性はない」と記す。

『鈔』の注釈態度は、必ずしも無批判な継承ではない。百四十一段の「よしいへといひける宰相」については、次のように記す。

大和の掾よしいゑ、参議の中に見えず。古来の勳物に、橘良殖(よしたね)、延喜十九年正月参議、六月宮内卿、二十年二月卒、従五位上、吉雄二男云々。よしいゑを良殖よしたねかと也。よしいゑとあればおぼつかなし。知れず。

また、百四十二段の「故御息所の御あね」についても、

此段いづれの御門の御息所の御姉共知れず。今案説、元方民部卿の女、更衣祐姫の姉歟と云々。たしかならず。

とする。すると、ままちちの少将を小野春風とする根拠はいったいどこにあるか。

それはひとえに「春の野ははるけながらも」と詠まれる「春」という語を持つ少将と合致するからにはかならない。「ままちちの少将」が小野春風でないことは『大和物語評釈』ほかの諸注で述べるとおりである。しかし、ここでは『鈔』がそのような把えかたをし

ていることに注目したい。『鈔』の『大和物語』に対する理解として、地の文と歌のことばとが緊密な関わりを持つものである、ということがありそうである。

一三九段の「人をとくあくた河てふ津の国のなにはたがはぬ君にざりける」については、次のようにいう。

芥河といふ名にはたがはぬと也。元良親王を芥河の宮と申と也。さて、名にはたがはぬといへり。津の国のなには思はず山城のとはにあひみん事をのみこそ

元良親王の異名が「芥河の宮」であるというのは、後代の注には全く無視されてしまう。わずかに『大和物語全釈』が「元良親王を「芥河の宮」と称した証は見当らない」と触れるだけである。元良親王が「芥河の宮」と称した証とともに、そう称さなかつたという証も見当らない。実際にはそのような称はなかつたように思われるが、それが事実であつたかどうかということはさほどの問題ではない。『鈔』がそのように考えたということが重要なのである。『鈔』にとつては、『大和物語』に収められた歌にはその類のものがあることは自明であつた。そのような『大和物語』の認識こそが、「もとよしのみこそ芥河の宮と申」という言の根柢なのである。

確かに『大和物語』にはそのような傾向が認められる。つぎに引くのは一七一段の冒頭部である。

今の左の大和少将に物したまひけるときに、式部卿の宮に常に参りたまひけり。かの宮に大和といふ人さぶらひけるを、物などのたまひければ、いとわりなく色好む人にて、女いとかしうめでたしとおもひけり。されど常にあふことかたかりけ

り。大和、

人しれぬ心のうちに燃ゆる火は煙は立たでくゆりこそすれ

といひやりければ、返事、

富士の嶺の絶えぬ思ひもあるものをくゆるはつらき心なりけり

とありけり。

ここに見える「大和」は、『大和物語』では本章段のみに見え、他には『後撰集』『新勅撰集』『続後撰集』にその名が見えるが、どのような人物であるかはほとんどわかつていない。勅撰集などからも、式部卿宮敦慶親王の家に仕えた女房で、藤原実頼と恋仲であつたというしかわからず、この章段以上の情報は無い。

この段の贈答は、人に知られず心の中に燃えている思ひの火は、煙は立たないまま燻り、後悔するばかりである、と大和がよんだのに対し、富士の嶺のように絶えず燃え続ける思ひの火もあるというのに、燻る、後悔するなんて、薄情なお心だつたんですね、と左大臣が返す。炎をあげずに煙を出して燃えるのが「くゆる」。それに「悔ゆ」を掛け、「煙はたたでくゆりこそすれ」と矛盾する言い回しが大和の歌の眼目となる。それを左大臣は、自分は富士のように絶えず思ひの火を燃やし続けているのに、燻る、悔いるなんて、ときりかえず。ここでの贈答の鍵となるのは掛詞「くゆる」であり、それを軸にして歌が詠み交わされる。

ここで注目したいのは返歌の「富士の嶺の絶えぬ思ひ」という部分である。このように富士山の噴火に恋の思ひを喩えるという発想

は、「富士の煙によそへて人を恋ひ」（古今集仮名序）と述べられたように、常套であった。

世とともに燃えゆく富士の山よりも絶えぬ思ひは我ぞまされる

（古今六帖・第一・天・火）

富士の嶺の煙絶えずと聞きしかどわが思ひにはおくれざりけり

（九条右大臣集・また）

くゆる思ひ胸に絶えずは富士の嶺の嘆きと我もなりこそはせめ

（平中物語・第九段）

これら以外にも、その用例は多い。したがって、「絶えぬ思ひ」を詠むにあたって「富士の嶺」を持ち出すのはごく自然の成行きであった。しかし、地の文に「大和」と繰り返されることで、そこには特別の意味合いが作り出される。「富士」は単に「富士」だというのではなく、「大和」ではない「富士」、「駿河」の「富士」となるのである。

このような意味合いは、実際に大和とこのような贈答をしたときには見えてくるものである。しかし、地の文が付いたとき、相手がただ「女」とだけ記されていたら見えなくなってしまうものである。「透明人間 あらわる あらわる」（注6）といっただけでは、そこに含まれる笑いは不確かなものでしかない。もしだれかがそこにある矛盾に気付いたとしても、それは一般化されたわけではない。「現われないのが透明人間です」と畳みかけたとき、はじめて表現の上に定着される。

故式部卿宮を、桂の皇女せちによばひたまひけれど、おはしまさざりけるとき、月のいとおもしろかりける夜、御文たて

まつり給へりけるに、

ひさかたのそらなる月の身なりせば行くとも見えて君は見  
てまし

となむありける。

（二〇段）

この章段において、「ひさかたの」の歌を詠んだのは誰かということについて、古来様々な議論がある。特に「よばふ」という語にからんで女性から男性へという場合に用いられるか、という点が問題となっている。桂の皇女が故式部卿宮敦慶親王を「せちによばひ」なさったが、親王がいらつしやらなかつた夜にさしあげた歌だというが、ひとまず、桂の皇女からの歌と解しておく。そうすると、「桂」は月の異名であるから、桂の皇女が「月の身なりせば」とよむことは、そこに矛盾が生じ、笑いを生み出すこととなる。

同じ内侍に在中将の住みけるととき、中将のもとに詠みてやりける、

秋萩を彩る風の吹きぬれば人の心も疑はれけり

とありければ、返り事、

秋の色を彩る風の吹きぬれど心はかれじ草葉ならねば

となん言へりける。

（一六〇段）

一六〇段の冒頭部である。「秋萩を」と業平に詠みかけた「同じ内侍」とは、前段に登場した「染殿の内侍」であるが、同じ贈答が『後撰集』秋上に収められている。

女のもとより、文月ばかりに言ひおこせてはべりける

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり  
よみ人知らず

返し

在平業平朝臣

秋萩をいろどる風は吹きぬともころはかれじ草葉ならねば  
まったく同じ贈答であるが、こちらではただ「女」とだけあって、  
染殿の内侍という呼称はどこにも出てこない。作者表記も「よみ人  
知らず」である。「大和物語」においては、その女が染殿の内侍で  
あると明記することによって、和歌に用いられる「彩る」との関連  
を生み出しているものであろう。

他にも六八段「枇杷殿」は歌中の「楡の葉」「柏木」と、一一〇  
段「枇杷の大臣」は歌中の「梅」と、という具合に地の文と和歌の  
中のことばとがそれぞれ呼応し合う場合が見出せる。これがただ一、  
二しか見えなかったとしたら、それは偶然と片付けてしまうことも  
できようが、同類の表現が多数見出されるということは、それを意  
図する精神があったものと認めてもよからう。そして、その根底に  
流れるものは、ひとことといえば「笑い」ということなのである。  
前稿でも少々触れたが、同形の語が、異なる意味で繰り返し用い  
られたり、地の文から和歌にまたがった縁語的な表現なども、今回  
見てきたものと近しい仕立てといえるかと思うが、それらについて  
はまた稿を改めることとしたい。

(注1) 拙稿「『大和物語』の言語感覚」(『実践女子大学文芸

資料研究所 電子叢書Ⅰ 平成一年三月)参照。

(注2) 以下、歌集の引用は『新編国歌大観』によったが、表記等  
は私に改めた。また、『万葉集』は原文の表記を活かして書き  
改めたもので、旧国歌大観番号を付した。

(注3) 『大和物語』の本文は、為氏本複製の、ミセ消などによる

最終的な形によった。表記や仮名遣いについては適宜改めたが、  
もとの形を傍記に残した。

(注4) 本文の引用は『古典文庫 百人一首戯作集』によった。な  
お、同集所収の『百人一首虚講釈』にも「ちはやふる」の歌が  
取り上げられておいる。そこでは

いにしへちはやがふりたる事を、ちはやふるとよみ給ひ、  
かみよもきかずとは紙屋与兵衛を頼み、るとかせても聞ざ  
りしかば、紙与もきかずと也。龍田川は今業平の家名ゆへ、  
からくれないとは、我おかへのからをつかはさぬ故、から  
くれないといふ心、水くぐるは、身をなげしといふ心、と  
とは、ちはやがおさな名故、斯よみ給ふと也。

と解かれており、「ちはや」「かみよ」とは「を人名とし、  
「龍田川」を業平の営む豆腐屋の屋号としている。

(注5) 『大和物語鈔』の本文は、内閣文庫蔵本の紙焼写真によっ  
た。表記や仮名遣いについては適宜改めたが、もとの形を傍記  
に残した。なお、もともとあった傍記は( )に入れて該当箇  
所の後に置いた。

(注6) 阿久悠「透明人間」